

PKETA 2010 国際会議に出席して

染矢正一（大分県立芸術文化短期大学）

2010 PKETA (the Pan-Korea English Teachers Association)は、10月9日(土) 韓国の Jinju 市の Gyeongsang 国立大学で行われた。Jinju 市は、釜山から車で2時間ほどの、人口30万の町である。韓国への旅行者が多く、生憎飛行機は満席で、博多の国際ターミナルから8日(金) ジェットフォイルに乗り、釜山まで行った。PKETA からは、釜山の Pukyong 国立大学の Shin 先生が出迎えにきてくださっていた。

釜山周辺の植生は極めて日本の植生に似ていた。ただ、松の木が多く、杉の木をまったく目にしなかった。日本との降雨量の差のためなのだろうか。学会会場に行くまで、高いビルや道路があちこちで工事中であった。経済の勢いを感じた。

学会が1日限りということもあり、午後5時半に湖畔のホテルに到着すると、すぐ懇親会(歓迎会)が始まった。デンマーク、香港、シンガポール、アメリカの招待教授たちと同席し、いろいろと話ができてよかった。

翌日10月9日(土)の午前9時から学会の受付が始まり、10時に開会式、10時半から Promoting Critical Thinking in EFL Classrooms というテーマのもと、1つの Plenary Speech、4つの Featured Speech、7つの分室に分かれて33の Presentation が、午後6時前まで行われた。韓国では現在小学校1年生から英語が導入されている。学会会場で働いているバイト学生たちには、流暢に英語を話す者が多かった。JACET では日本語の発表が半分、英語の発表が半分くらいではなかろうか。しかし、PKETA の発表では、41の発表のうち、4つが韓国語、残り37は英語の発表であった。

私の発表は Featured Speech の1つとなっていて、Jerry Gebhard 教授(釜山国立大学)、Dennis Johnson 教授 (San Francisco City College)、Perlita C. Basa 教授 (RELCAAP 副会長 フィリピン) と同じ時間帯に同時に行われた。発表のタイトルは Developing Teaching Materials on Communicative English で、英語のコミュニケーション能力の向上をはかるための教材のあり方について、いくつか提案をした。

万が一のために日本からパソコンを持参したが、接続がうまくいかなかった。また、VHS や DVD などの一部を試聴してもらったためスタッフに調整をお願いしたが、短時間では調整できなかった。しかし、発表までには何とか用意が整った。外国で機材を使って発表する場合には、不測の事態を想定して時間にゆとりをもつことが大切であることを痛感した。

学会発表がすべて終了したあとは、Raffle という抽選会があり、学会参加者が部屋を埋め尽くすほど詰めかけていた。Oxford 出版などの出版社が、韓国語の辞書や、書籍などを景品に出していたが、PKETA の永久会員証という興味ある景品もあった。昨年の PKETA は、韓国第2の都市、人口500万の釜山で行われたこともあり、参加者も多く、景品は今年よりもよかったらしい。

学会終了後の翌日は、やはり Pukyong 国立大学の二人の先生から、釜山港のジェットフォイル発着場まで車で送っていただいた。大会を通じていろいろな方々と意見交換をしたり、親交を深めることができ、非常に有意義な学会であった。

上村 俊彦（長崎県立大学）

2010年度 PKETA 国際大会に、染矢先生とともに本支部を代表して参加させていただいた。

大会当日に渡された大会予稿集は、各発表者に A4 サイズで4ページのスペースを提供するなど充実した構成となっていた。予稿集を斜め読みしたところ、「初等教育 1、2」のセクションに韓国語に

よる論文が集中しているが、そのほかの多くは英語による論文であった。また、発表は英語教育や研究に関する実践的な成果を報告したものが多いたとの印象を持った。

大会全体の運営面では、英語による運営が行われているという印象を強く持った。大会前日の国内外のゲストを招いた懇親会、当日の大会開会式の運営はほぼすべて英語でおこなわれていた。また、予稿集の英語論文を見て入った部屋では、一部の例外を除いてすべて英語による口頭発表がおこなわれていた。例外は、主に韓国人 PKETA 会員が集まった大会終了時の抽選会 (Raffle) の司会運営であった。様々な景品がほぼ全員の参加者に提供された。ちなみに、私は韓国の中学生用英韓辞典を入手することができた。英韓辞典では A-bomb は bomb の用例、英和辞典では見出し語扱いであるなどさまざまな相違点を発見することができた。

本支部の研究大会に PKETA から派遣されてくる方達に、本支部紀要への投稿を毎回呼びかけているが、近年、ほとんどの方は投稿を辞退されている。これは、大学教員の採用や昇格時にはどの学術誌に論文が掲載されているかが問題となるようで、残念ながら本支部紀要については十分な認知がなされていないことも大きく関わっているようである。この点は、送り迎えでお世話になった 3 名の Pukyong 国立大学の先生方の発言からもうかがうことができた。本支部紀要の国際的な認知は、今後の大きな課題であろう。